

バスケットボール競技における有効な攻撃法の一考察 ～トップチームに見るペリメーターシュートのパターン～

コーチング科学研究領域
5009A023-1 数馬 寛人

研究指導員：倉石 平 准教授

I. 緒言

1. 研究の背景

バスケットボールは、1891年に創案されたスポーツで、現在までに数々のルール改訂がなされ、1985年のルール改訂によりスリーポイントラインが導入されて以来は、リングから遠い位置から放たれるシュートの頻度が改訂当初よりも多くなった。またゴール近辺にボールを集める事の重要性は、既に言及されている²⁴⁾ものの日本は、世界各国と比較すると平均身長が劣っている為、諸外国のチームと同じ形態のオフェンスのみでは同じ成果は出ないのではないかと筆者は仮説をたてた。さらに準備局面における角度の変化がシュートの確率に影響を及ぼす事はすでに示唆されているが³⁾⁶⁾²⁷⁾、日本国内の試合を対象にした検証はいまだに発表されていない。そこで本研究では、ゴール近辺からのアシストに伴うペリメーターシュートに着目して分析を行った。

II. 方法

1. 対象ゲーム

JBL2009-2010 シーズンにおけるアイシンシーホースの全47試合。

2. 調査方法

アイシンが撮影を行った試合映像を基に、スポーツ分析ツールであるゲームソフトの power Analysis Eizo Jockey を用いて対象となる試合のデータを収集の上分析を行った。また区分けにおいては、判定前に事前に基準となるフローチャートを作成の上参考とした。

3. 分析項目

全攻撃をファストブレイク、セカンダリーブレイク、セットプレイに分類後にセットプレイに該当するものを比較した。項目は、1) ペリメーターシュート、2) インサイドシュート、3) その他、4) オーバータイムとした。さらにペリメーターシュートに該当するものをそれぞれ、「I→O」：制限区域内からのアシストによるもの、「O→O」：制限区域より外側からのアシストによるもの、「O」：シュート試投選手自らの技術のみによりアシストを要さないもの、

「pick」：ピックプレイによるもの、「hand off」：ハンドオフパスによるものの5つに分類した。「I→O」については、技術を1) キックアウトと2) インサイドアウトの2つに分類し比較した。集計項目については、1) 攻撃回数、2) 攻撃内容の割合、3) シュート試投数、4) シュート試投内容の割合、5) シュート成功数、6) シュート失敗数、7) シュート成功率、8) ファウルオン、9) ターンオーバー、10) オフェンスリバウンド数、11) オフェンスリバウンド獲得率とし、ポジションについては、制限区域を1) Low post、2) Middle post、3) High postの3種類に、制限区域より外側を1) Corner、2) Wing、3) Top of the key（以下Topと略記）の3種類に分類し区別を行った。

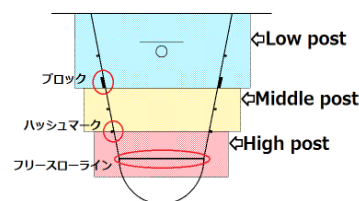


図1 制限区域内のポジション

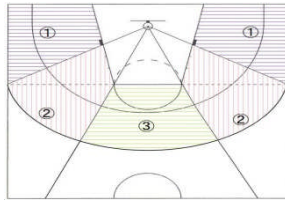


図2 制限区域より外側のポジション

4. 分析方法

Power Analysis Eizo Jockey を用いて、上記に記した分析項目に対して、比較の上検証した。また SPSS 12.0J for Windows を使用して、各ペリメーターシュート間のシュート試投数やシュート結果、リバウンド結果に対し X2 乗検定による統計的処理を実施した。

Ⅲ. 結果・考察

1. セットプレイの比較

インサイドシュートが最も多い攻撃頻度と最も高い成功率を示したが、試投者を日本人に特化すると攻撃頻度は、ペリメーターシュートが 58% と最も高い数値を示した。

2. ペリメーターシュートの比較

攻撃回数、成功数、成功率全てにおいて「I→O」が最も数値が高く、X2 乗検定によりシュート試投数においては有意な差が、成功率においては、有意な傾向が認められ、「I→O」によるペリメーターシュートは、他のオフENS方法に比べ効果的である事が示唆された。しかしながらオフENSリバウンド獲得率においては、有意差は見られず各局面毎のオフENSリバウンドへの影響はない事が本研究では示唆された。また試投選手別では、日本人選手は、最も「I→O」を多用しており、外国人選手は、最も「O」を多用していた。さらに勝ち試合ほど「I→O」の頻度が多く、「O→O」と「O」が少ないという結果となった。

	シュート種類
カイ2乗(a)	66.433
自由度	2
漸近有意確率	0.000

表1 各シュート体系とシュート試投数の関係

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	5.783(a)	2	0.055
尤度比	5.787	2	0.055
線型と線型による連関	5.482	1	0.019
有効なケースの数	920		

表2 各シュート体系とシュート成否の関係

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	1.939(a)	2	0.379
尤度比	1.967	2	0.374
線型と線型による連関	1.67	1	0.196
有効なケースの数	632		

表3 各シュート体系と OR 獲得有無の関係

3. キックアウトプレイの比較

パッシングエリアが Top の時が攻撃頻度及び成功率は、最も高い数値を出したが、シューティングエリアにおいての差は見られなかった。

4. インサイドアウトプレイの比較

パッシングエリアが右 post の時が攻撃頻度が最も高く、High post の時が最も成功率が高かった。またシューティングエリアが Top の時が攻撃頻度が最も高く、左 Corner の時が最も成功率が高かった。

Ⅳ. まとめ

ペリメーターシュート試投の為の準備局面として「I→O」からのアシストの有効性を検証する事ができた。本研究で得られた結果を、今後実際に現場で指導する際に活かしていきたい。